

# エドガー・ウィレムスの歌に関する日本語の歌詞の検討

——『No.1 2音から5音の歌 (No.1 Chansons de deux à cinq notes)』を題材に——

若 林 一 恵

## はじめに

本研究の目的は、エドガー・ウィレムス (Edgar Willems, 1890-1978) の音楽教育実践において使用されている歌を対象に、どのような日本語の歌詞を当てるのが適切であるかについて検討することである。

ウィレムスの音楽教育は、海外で多様な成果を上げている。しかし、日本ではほとんど知られておらず、先行研究も少ない。したがって、当然ながらその教育実践もこれまで行われてきていない。今後、ウィレムスの音楽教育を日本で実践し、その教育成果を検証したいと考えた場合に、課題となる点の一つがレッスンの中で歌われる楽曲の歌詞の問題である。ウィレムスの音楽教育で用いられている楽曲は、ウィレムス自身の作曲によるオリジナルの歌やフランスやその他の国々で親しまれている歌など数多い。これらの歌の楽譜は、ウィレムスが教育実践に向けて執筆した17冊にのぼる一連の指南書『教育の覚え書き帳 (Carnets pédagogiques)』のうち、『No.1 2音から5音の歌 (No.1 Chansons de deux à cinq notes)』と『No.2 音程の歌 (No.2 Chansons d'intervalles)』、『No.2B 音程の歌 伴奏付き (No.2B Chansons d'intervalles avec accompagnement au piano)』の3冊に収められている。これらの曲集に掲載された歌の歌詞はいずれもフランス語で書かれているが、現在ウィレムスの教育実践が普及しているヨーロッパや中南米の諸国では、それぞれの母国語に応じてイタリア語やスペイン語、スロベニア語などの歌詞で歌われている。

そこで本研究では、今後日本で実践研究を行っていくための予備的研究として、導入期に使用される『No.1 2音から5音の歌』に収められた楽曲の中から現在の教育実践でも頻繁に歌われる楽曲3曲を対象に、日本語の歌詞について検討していく。なお、海外の楽曲が日本で歌われるようになっていく過程において、原曲とは全く異なる内容の訳詞が当てられている例や複数の訳詞が存在している例は少なくないが (海老沢1986 ; 2012 ; 浜崎2016 ; etc.)、この点について制約を設けないことは言葉の選択肢を際限なく広げることになってしまうため、本研究では原則的に原曲の歌詞が表現している内容を損なわない範囲で日本語の歌詞を検討していくこととした。

## 1. ウィレムスの音楽教育実践の概要

ウィレムスは、乳児が母国語を習得していく際の心理学的な発達過程に、人間が音楽の諸要素を習得していく過程を照らし合わせて表で示している(Willems 1975, pp.22-23)。乳児が母国語を習得していく過程において、最初に文字の読み書きを学ぶことは想定し得ないだろう。まず、家族をはじめ身近な人の声や物音などといった物理的に聞こえる音を聴き、発音源を見て、その音を声で模倣しながら、次第に自発的な言葉を発するようになっていく。この、①聴く、②見る、③模倣する、という過程にしたがって、ウィレムスの音楽教育の導入期は構築されている。つまり、最初に楽譜の読み方や書き方から始めるのではなく、声や鐘、小物楽器や鍵盤楽器などの音を注意深く聴き、その形状や奏法を視覚的に捉え、それらの音を声で模倣することから始める。加えて、歌やリズムで即興的な演奏をし、音や音楽を身体全体で表現するようになってから、それらの感覚の裏付けとして楽譜の読み書きや音楽理論を学んでいく。楽器を演奏するのはさらにその後である。ウィレムスの音楽教育を実践するフランス・リヨンの音楽教室リメア(Ryméa)のウェブサイトには、「音楽は言葉であり芸術である。ゆえに、母国語と同じように発達させることができる。(中略)最初に子どもが話す時にはまだ読み書きを学んでいないのと同様に、この音楽教育はト音記号からではなく、音響の世界における能動性と感受性を浸透させることから始める。」と記述してある<sup>1</sup>。

このような理念に基づくウィレムスの音楽教育実践は、具体的には「4つの段階」に沿って進められていく。第1段階と第2段階は「音楽を愛することを学ぶ」ための「種まきの期間」と位置付けられている。この時期に、さまざまな音を聴き分けたり、多くの歌に親しんだり、即興演奏をしたり、音楽の動きに身体の動きを伴わせたりといった活動を行う。第3段階になって楽譜の読み書きや音楽理論を学び、第4段階になって子どもたちの意思によって選ばれた楽器の個人レッスンと、ソルフェージュのグループ・レッスンが行われる。子どもたちは「楽器を演奏するために音楽を学ぶ」のではなく、「音楽を表現するために楽器を演奏する」ように導かれていく。

これらの段階を経ることによって、「知識を与える前に経験させ」、理論と実践とが乖離しない音楽教育を実現している(若林2016b, p.55)。

## 2. 『教育の覚え書き帳』における『2音から5音の歌』

### 2-1. 『教育の覚え書き帳 (Carnets pédagogiques)』の概要

ウィレムスは、自らの著書を出版する目的で、1940年に出版社プロ・ムジカ(Editions Pro Musica)<sup>2</sup>を創設した。この出版社は現在も存続しており、ウィレムスの書籍や教育実践で使用される教具、ウィレムスの弟子の著書などを直接購入することが可能である。ウィレムス

は、生前この出版社から多くの著書に加えて全17冊にのぼる『教育の覚え書き帳』を出版している。『教育の覚え書き帳』は、主に指導を始めたばかりの若い指導者を導くことを目的としている。17冊の内訳は、歌、聴覚育成、リズム、ピアノ、身体の動きを促すための曲集といったように教育内容の要素別に構成されている。いずれも一冊あたりはわずか15ページ程度ながら、ウィレムスの思想と実践に関する情報が凝縮されたものとなっている。内容の大部分を文章が占めているものから、実践で用いられる楽譜のみが掲載されているものまで、各本の構成は一様ではない。すでに廃刊となっているものも含まれるが、以下にその全体像を示す(表1, 邦題筆者)。

表1 『教育の覚え書き帳』の全体像

|       |                                                                                                                           |       |                                                                       |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|-----------------------------------------------------------------------|
| No.0  | 子どもたちの音楽の導入<br><i>Initiation musicale des enfants.</i>                                                                    | No.5  | 書き取りと読み取りの導入<br><i>Introduction à l'écriture et à la lecture.</i>     |
| No.1  | 2音から5音の歌<br><i>Chansons de deux à cinq notes.</i>                                                                         | No.5B | ソルフェージュのはじめに(絶版)<br><i>Les débuts du solfège.</i>                     |
| No.2  | 音程の歌<br><i>Chansons d'intervalles.</i>                                                                                    | No.6  | ピアノのはじめに(絶版)<br><i>Les débuts au piano.</i>                           |
| No.2B | 音程の歌 ピアノ伴奏付き<br><i>Chansons d'intervalles avec acc. au piano.</i>                                                         | No.7  | ピアノのための読譜の初歩<br><i>Première littérature</i>                           |
| No.3  | 聴覚の訓練<br><i>Les exercices d'audition.</i>                                                                                 | No.7B | 4手のための読譜の初歩<br><i>Première littérature pour piano à quatre mains.</i> |
| No.4  | リズムとメトリックの訓練<br><i>Les exercices de rythme et de métrique.</i>                                                            | No.7C | 鍵盤のたのしみ<br><i>Amusements au clavier.</i>                              |
| No.4B | リズム打ちとリズム的な本能<br><i>Les frappés musical et l'instinct rythmique.</i>                                                      | No.8  | ピアノのための12のやさしい曲<br><i>Douze pièces faciles pour piano.</i>            |
| No.4C | 音楽教育の授業における<br>音楽のリズムと本能的な動き<br><i>Le rythme musical et le mouvement naturel<br/>dans les cours d'éducation musicale.</i> | No.9  | 小さな歩行(ピアノ用)<br><i>Petites marches faciles pour piano.</i>             |
|       |                                                                                                                           | No.10 | 小さな踊りと跳躍、歩行(ピアノ用)<br><i>Petites danses, sauts et marches.</i>         |

本稿で取り上げる3つの楽曲は、いずれも『No.1 2音から5音の歌』に収められている。『教育の覚え書き帳』の全体の中で「歌」をテーマに扱っているものは、この後に続く『No.2 音程の歌』および『No.2B 音程の歌 伴奏付き』がある。

『教育の覚え書き帳』の原著はいずれもフランス語で書かれているが、現在はスペイン語やイタリア語、ポルトガル語などに翻訳されている。英語に翻訳されているのは、『No.0 子どもたちの音楽の導入』のみである。

## 2-2. 教育実践における『No.1 2音から5音の歌』の役割

『No.1 2音から5音の歌』は、教育的意図と芸術的意図によって選ばれた、またはウィレムス自身によって作曲された、歌の楽譜が収められた曲集である。『2音から5音の歌』というタイトルについては、2つの音のみによって構成されている楽曲にはじまり、5つの音によって構成される楽曲までを収めた曲集であるという意味である。実際に収められている楽曲の数は、2音から成る歌が3曲、3音から成る歌が10曲、4音から成る歌が3曲、5音から成る歌が34曲となっており、その大部分を5音から成る歌が占めている。

本書の目的は、「子どもたちの内に美的な感覚と、歌うことに対する楽しみや喜びを目覚めさせること」である。原文では「喜び」や「楽しみ」を表す言葉として‘plaisir’が用いられているが、ウィレムスの著書においては、同様の意味をもつ ‘joie’ という単語とあわせて頻繁に用いられている。いずれにしても、ウィレムスの教育実践において子どもたちが「喜び」を感じられることを重視しているという点は特徴的である。本書の序文を書いているジャック・シャピユイ (Jacques Chapuis, 1926-2007) <sup>3)</sup>は、「子どもたちがただ楽しむためだけに歌うことは、自発的で生き生きとした音楽表現へと至らせるためのもっとも確かな手段である」(Willems 1996, p.1)と述べている。本書に掲載された楽曲は、歌詞を付けて歌うだけでなく、移調することや母音唱を行うこと、さらに、口を閉じてイメージの中で内的に歌うことも求めている。そのために、レッスンでは柔らかな雰囲気を作り出し、内的に聴くことを助けるよう指導者に向けて指示している。また、テンポやニュアンスを変化させて歌うこと、メロディのリズムや拍、分割した拍を叩きながら歌うことなど、一つ一つの楽曲をさまざまに活用する方法を示している。これらの実践を通して子どもたちの内に音楽性を育て、内的聴感を育み、音楽的に表現できるように導いている。

本書の楽曲の多くはウィレムス自身による作曲であるが、他に、フランスやスイス、ドイツ、ルーマニアの民謡なども含まれている。そのほとんどが長調であり、明るく親しみやすく、印象的で覚えやすい旋律が使われていることが特徴的である。楽曲の多くはハ長調で、時にト長調の楽曲もあるが、実際の教育実践では指導者のピアノ伴奏の導きによってさまざまな調性に移調して歌われるため、一つ一つの楽曲固有の調性はそれほど問題ではない。また、歌詞の一部がその楽曲の音高名と一致しているものも数曲あり、これらについては子どもたちに音高の記憶を促進しようとする教育的な意図がうかがえる。これに対し、短調や教会旋法、あるいは拍子のない歌については数が少ないため、長調と比較するとそれほど親しむことができないのではないかと懸念される。

### 3. 楽曲と歌詞の事例

#### 3-1. 3音の歌《ゆりかご>Dans son Berceau rose》

《ゆりかご>Dans son Berceau rose》は、ウィレムスが作曲した楽曲であり、「3音の歌」として掲載されている。楽曲は4分の2拍子で、ソーラーシの3音のみ、いずれも順次進行によって構成されている。テンポの指定はなされていないが、おおよそLarghettoの速度で歌われている。速度変化もなく拍感が安定しており、いかにも「ゆりかご」が揺れる様を描写したような曲調となっている。

以下に、原詞および日本語の歌詞を付した楽譜を示す。

譜例1.

Dans son Berceau rose  
ゆりかご

Dans son ber - ceau ro - se Un en - fant re - po - se,  
 す や す や ねん ね あ か ちゃ ん ねん ね

Do - do, do - do, Do - do, do - do.  
 ゆ ら ゆ ら ゆ り か ご で

曲名の‘Dans son berceau rose’は、直訳すると「ピンクのゆりかごで」という意味である。冒頭の2小節の歌詞も同様である。日本語でこの内容を歌詞にすると、文字数が多くなり原曲のリズムを損ねてしまう。また、原曲の歌詞は、2小節目の「ピンク」を意味する‘Rose’と、3小節2拍目裏からの「休息」を意味する‘repose’が韻を踏んでいる。それを日本語でも反映させるために、当初は「すやすやねてる あかちゃんねてる」という歌詞を検討していた。しかし、原曲では2小節目と4小節目がそれぞれ4分音符二つであるのに対し、「ねてる」という歌詞を当てることによって1拍目の4分音符が8分音符二つに分かれることになってしまう。これでは、原曲のもっているリズム感を損ねてしまうと考えた。また、2小節単位で歌詞の文章が切れることによって、繋がりが悪くなってしまうと考えた。他方、5小節目以降に目を向けると、原曲では‘do do’という歌詞が4回繰り返されている。‘do do’は、幼児語で「ねんねする」という意味である<sup>4</sup>。そこで、日本語の歌詞としては、2小節目と4小節目に「ねんね」という語を選ぶことによって、韻を踏むことと、4分音符2つのリズム感を損

ねないことを両立できるようにした。そして、「ねんね」という語を選択するのにあわせて、1小節目の8分音符4つに「すやすや」というオノマトペを当て、3小節目には「あかちゃん」という単語を当てることとした。曲名であり原曲の中では冒頭に使用されてもいる「ゆりかご」という語については、5小節目以降に用いることを検討した。まずは5小節目と6小節目の4分音符4つに、ゆりかごが揺れる表現として「ゆらゆら」というオノマトペを当て、7小節目と8小節目の歌詞として「ゆりかごで」を当てた。

この楽曲の日本語の歌詞を検討する上では、まず、原曲のもつリズム感を損なうことがないように、音符の数と歌詞として用いる言葉の文字数が一致することを重視した。また、原曲の歌詞が韻を踏んでいる箇所については、日本語でも同様にした。その上で、本研究の指針である、歌詞の内容が原曲の内容と大きく違わぬようにすることも留意した。さらに、原曲の歌詞に「ねんね」という幼児語が使用されていることや、子どもの歌の大部分にオノマトペが使用されているという研究成果も報告されていることから(葛西, 2012)、日本語のオノマトペも活用し、子どもたちが歌詞にも親しみをもつことができるよう留意した。

### 3-2. 5音の歌《ことりLa Perdrix》

《ことりLa Perdrix》は、フランスで親しまれている子どもの歌である。『No.1 2音から5音の歌』においては「5音の歌」の最初に掲載されている楽曲である。《ことり》は、4分の2拍子で、弱起から開始する。おおよその速度は、前項で取り上げた《ゆりかご》と同様にLarghettoで歌われている。楽譜はハ長調で書かれ、ドーレーミーファースの5音が冒頭の4小節にわたって同音連打を含む順次進行で上行し、後半の4小節をかけて同様に下行していく。原曲は、ここまでの8小節の楽曲である。しかし、ウィレムスはこの楽曲の続きとして8小節の旋律を作曲しており、『No. 1 2音から5音の歌』では元の楽譜の上部に補足的に小さく示されている。現在のウィレムスの教育実践でも、ここに付記された8小節を含めて歌われるのが通例である。ウィレムスが作曲した8小節は、ドーシーラーソーファの5音によって構成されている。まずは原曲の終止音である「一点ハ」音からオクターヴ跳躍して「二点ハ」音から開始し、同音連打を含む順次進行によって下行していく。

次頁に、原詞および日本語の歌詞を付した楽譜を示す。

曲名の‘La Perdrix’とは、「やまうずら」<sup>5</sup>のことである。しかし、ここで「やまうずら」を曲名とせず、「ことり」とした理由は二点ある。第一に、「やまうずら」が、日本の子どもたちにとって馴染み深い鳥であるとは考えにくかった点である。第二に、前項に取り上げた《ゆりかご》にも見られた歌詞の特徴であったが、この楽曲ではより明確に歌詞が韻を踏むように作られているという点である。つまり、冒頭の歌詞は音名に等しく‘Do-ré-mi’となっていることに加えて、そこに続く歌詞が‘La Perdrix’となっており、音名の‘mi’と、その後の‘Perdrix’が韻を踏んでいる。これを日本語の歌詞にも反映させるためには、「イ」の母音で終わる語を

譜例 2 .

La Perdrix  
ことり

Do-ré - mi, La per - drix, Mi - fa - sol, Prend son vol, Fa - mi - ré, Dans un  
ドレ ミ ことり ミファソ とぶよ ファミレ そうげん

6  
pré, Mi-ré - do, au bord de l'eau. Do-si - la, La voi - la, Si - la - sol, dans son  
へ ミレド みずべ を ドシラ ラララ シラソ とぶ

12  
vol, La - sol - fa, près du bois, Mi - ré - do, au bord de l'eau.  
よ ラソファ もり や ミレド みずべ を

選ぶ必要がある。また、8分音符2つと4分音符1つというリズムに当てはまる語である必要もあるため、3文字の言葉であることも重要であると考えた。以上の事柄を踏まえて、また、「やまうずら」が鳥であることから、「ことり」という3文字の語を選択した。

《ことり》は、この後に続いている歌詞も全て同様に音名と歌詞とが韻を踏んでいる。順に、‘Mi-fa-sol, Prend son vol (飛び立つ)’、‘Fa-mi-ré, Dans un pré (草原で)’、‘Mi-ré-do, au bord de l’eau. (水際で)’となっている。下線を引いた音名の母音と、それに続く歌詞の母音とを一致させることと、原曲の歌詞の内容を反映させること、さらに、原曲のリズムも変化してしまわないことを留意しながら日本語の歌詞について検討した。その結果、「ミファソ」の後には「飛ぶよ」、「ファミレ」の後には「草原へ」、「ミレド」の後には「水辺を」という歌詞を当てた。「ファミレ」の後の「エ」の母音で終わる語については、子どもたちによりわかりやすい表現はないものかと検討を重ねた。当初は、「のはら」や「ひろば」、「はらっぱ」といった語を当てはめたいと考えた。しかし、これらはいずれも「ア」の母音で終わる語であることから、現時点では「草原へ」という歌詞を選択した。

ウィレムスによって付記された後半の8小節も、前半の8小節と同様に音名と歌詞とが韻を踏むように構成されている。‘Do-si-la’に続く‘voilà’という表現は英語の‘there is’と同様の意味をもち、単独使用では「それが～である」、「そこに～がある」という意味である。この箇所については、当初「こちら」や「そちら」、「どちら」などの「ら」で終わる「こそあど言葉」を当てはめることが可能なのではないかと考えたが、子どもたちにとって親しみやす

い歌詞という視点から、音名の「ラ」に続けて鼻歌を歌うように「ラララ」というオノマトペを採択した。‘Si-la-sol’に続く‘dans son vol(飛行中)’には前半と同様に「飛ぶよ」、‘La-sol-fa’に続く‘près du bois(森の近く)’には「森へ」、‘Mi-ré-do’に続く‘au bord de l’eau(水際で)’には前半と同様に「水辺を」という歌詞を選択した。

《ことり》では、歌詞の言葉としての繋がり以上に歌詞が韻を踏んでいることが重視されていると考えられる。このため、日本語でも韻を踏むことができる歌詞であるということを優先的に検討した。また、8分音符と4分音符の規則的な連なりによってもたらされるリズム感も損なわぬよう、音符の数と文字の数も合うように留意した。さらに、歌詞の内容も原曲に沿ったものとなるよう、検討を重ねた。

### 3-3. 5音の歌《おさんぽ べんごしII' était un Avocat》

前項で取り上げた《ことり》と同様に、《おさんぽ べんごしII' était un Avocat》もフランスの子どもの歌である。『No.1 2音から5音の歌』では「5音の歌」として掲載されており、実際にドーレーミーファーソの5音で構成されている。《おさんぽ べんごし》は、4分の2拍子で、軽快なAllegroで歌われる。上行の際の3度の跳躍と下行の際の順次進行の音型と、下行に際しての付点音符が特徴的である。

以下に、原詞および日本語の歌詞を付した楽譜を示す。

1小節目から2小節目と、5小節目から6小節目には、それぞれ同じ歌詞が付けられている。一番の歌詞は、曲名である‘Il était un avocat’となっている。直訳すると、「彼は弁護士

譜例3.

#### Il était un Avocat おさんぽ べんごし

Il é - tait un a - vo - cat, Ti - re - li - re, li - re,  
お さ ん ぽ べん ご し ラン ララ ラ ラ ラ

Son p'tit cha - peau sous le bras,  
ぼう し うで に かか え て

En tom - bant s'est ca - ssé l'bras,  
すっ てん ころ りん うで おつ た

Pour - tant il n'en mou - rra pas,  
い た い の とん でい け

5  
Il é - tait un a - vo - cat, Ti - re - li - re la.  
お さ ん ぽ べん ご し ラン ララン ラ ラ



だった」という意味になる。まず、「弁護士」という職業が子どもたちにとって親しみのあるものであるかどうかという点については、今後更なる検討の余地があると考えている。この点については、楽曲のリズムも踏まえて「校長先生」や「パン屋のおじさん」などのように「弁護士」に代わる他の職業を当てはめることも検討した。しかし、本研究では原曲の歌詞の内容に沿うものであることを指針としているため、まずは原曲にしたがって「弁護士」を使用することとした。次に、「弁護士だった」という過去形が使用されている点について、どのように日本語の歌詞に反映させるべきかを検討した。この点については、「少なくとも現時点で弁護士の仕事をしていない」という意味に置き換え、「おやすみ」や「休日の」などといった歌詞を検討した。しかし、「おやすみ」という語は就寝前の挨拶とも捉えられることや、「休日」という語は幼い子どもにとって馴染みのある言葉ではないのではなかろうかといったことを考慮した。以上の事柄を踏まえて、子どもたちも日常的に用いる語であり、8分音符4つに収まる語でもあるものとして「おさんぽ」という語を選択した。

3小節目から4小節目と、7小節目から8小節目には、それぞれフランス語のオノマトペである‘Tire lire lire’と‘Tire lire la.’という歌詞が与えられている。そのため、日本語でもそれぞれ「ランラララ ララ」と「ランラララ ラ」というオノマトペを当てることとした。

二番以降の歌詞の最後には毎回‘etc.’と記されており、子どもたちが自由にさまざまな言葉を当てはめることができるようになっている。『No.1 2音から5音の歌』の中で挙げられた二番は‘Son p’tit chapeau sous le bras (彼の腕の下の帽子)’という歌詞であるため、日本語でもその内容を反映して「ぼうし 腕に かかえて」とした。続く三番は、短調で歌うように指示されている。歌詞は、‘En tombant s’est cassé l’bras (落ちながら腕を折った)’という内容になっており、短調で歌われるのはこの歌詞によるものであると考えられる。そこで、日本語の歌詞は「すってんころりん 腕折った」とした。四番は再び長調に戻して歌われる。歌詞は、‘Pourtant il n’en mourra pas (それでも彼は死ぬことはない)’という内容になっている。この部分については、日本語では「死ぬ」という表現は避けた。当初、原曲の音符の数を考慮して「しかたがないよ」、「でもへっちゃら 大丈夫」などといった歌詞を検討していた。しかし、最終的には、三番の「転んで腕を折ってしまった」という歌詞の内容を踏まえて、また、子どもたちにとっても馴染みのある表現として、「いたいの とんでいけ」という歌詞を選択した。

前項までの《ゆりかご》や《ことり》とは異なり、《おさんぽ べんごし》の歌詞には韻を踏む箇所がなく、歌われる速度も速い。また、先述したように、1小節目から2小節目と5小節目から6小節目に同じ歌詞が付けられており、尚且つ、3小節目から4小節目と7小節目から8小節目の4小節にはオノマトペが当てられている。したがって、歌詞について検討できる部分は最初の4小節しかない。当初は原曲のリズムを崩さない日本語の歌詞について検討を重ねていたが、それよりもむしろ、この楽曲としては全体を通して一つの物語が作ら

れているという点に特徴があると考えたため、日本語の歌詞でも内容を反映させることと、子どもたちが歌って楽しい歌詞であるかという点を重視した。

この楽曲の旋律を子どもたちがピアノで弾き歌いする場合には、短調で歌われる三番のみ開始音を「レ」にして自動的に二短調を作り出して歌われている。しかし、通常のグループ・レッスンの中で歌われる際には三番でも開始音が変わることはなく、多くの場合はへ長調やト長調で歌われる。

## おわりに

本研究では、原曲の歌詞が表現している内容を損なわないことを指針としながら日本語の歌詞について検討してきた。そのために、まずは原曲の歌詞をそのまま訳出した。次に、楽曲分析を行い、それぞれの楽曲の特徴を明らかにした。

本研究を進めていく上で、さらに検討すべき点は、次の二点である。一つ目は、原曲に特有のリズム感を優先すべきかどうかという点である。例えば、今回取り上げた楽曲のうち、《ゆりかご》はリズム感を優先し、歌詞の言葉を増やすべきではないと判断した。《ことり》も、それぞれ音名が提示された後の歌詞は言葉が多くなるよう留意した。しかし、《おさんぽ べんごし》については、楽曲のリズム感よりも全体を通して歌詞の内容を反映させることを優先した。二つ目は、原曲の歌詞そのものが有している言葉として特徴的な諸要素を日本語に反映させることができるかどうかという点である。例えば、《ゆりかご》と《ことり》では原曲の歌詞が韻を踏んでいたりと、また、《ゆりかご》と《おさんぽ べんごし》ではオノマトペが用いられていたりとといった特徴が見られた。これらの要素について、日本語として反映させることができるかどうか、また、反映させられる場合にも、どのような表現を選択するかについて、考え得るいくつもの可能性の中から吟味する必要があることが明らかとなった。

本研究で取り上げた3曲に共通していたのは、短く易しい楽曲だからこそ限られた音符の中に入れられる言葉が少ないという点である。今回多くの場面で課題となった点は、原曲の音の数が少ないことに加えて、日本語の特性として一つの音に一文字を当てざるを得ない場合が多く、歌詞として反映させられる言葉の数が少ないという点であった。その作業は筆者が当初想定していたよりもはるかに困難を極めるものであった。

歌詞そのものの内容と言葉としての語感、楽曲としてのリズム感という三点の視点のうち、どの視点を優先するのかについては、規則性をもって判断できるものではない。原曲の特徴を踏まえた上で、その楽曲が何を重視しているのかを見極め、歌詞を検討していく必要がある。また、そうして選択した歌詞の一つ一つについて、日本の子どもたちが「喜び」を感じながら、親しみをもって歌うことができるかどうかという視点から見直し、場合によっては

再検討していくことも重要であろう。

今後は、本研究で得られた知見をもとに他の楽曲についても研究を進めていきたい。また、実際に今回取り上げた3つの楽曲を用いて日本の子どもたちに実践し、歌いやすく親しみやすい歌詞に向けて更なる研究を重ねていきたい。

## 註

- 1 音楽教室リメア (Ryméa) のウェブサイト <https://www.rymea.fr/la-p%C3%A9dagogie/> (2017年8月27日閲覧)。
- 2 出版社プロ・ムジカのウェブサイト Editions Pro Musica <http://www.editionspromusica.com/index.php> (2017年8月10日閲覧)。
- 3 ジャック・シャピエイは、20世紀のスイスとフランスを中心に活躍したピアニスト兼音楽教育者である。ウィレムスの弟子であり、国際ウィレムス連盟 (Fédération Internationale Willems) の創設者でもある。ウィレムスの音楽教育を国際的に普及させるにあたり、多大な貢献を果たした。
- 4 デイコ仏和辞典 (2003) p.496.
- 5 広辞苑では、「キジ目キジ科の鳥。ウズラに似るが大きく、頭・胸は褐色、背に灰褐色に細かい黒横線があり、雄は腹面に蹄鉄形の大きな黒斑がある。シベリア南部から中国北部にかけて分布。」と説明されている。

## 参考文献

- Editions Pro Musica, <http://www.editionspromusica.com/index.php> (2017年9月4日閲覧)
- Fédération Internationale Willems, <https://www.fi-willems.org/> (2017年9月4日閲覧)
- Ryméa, <https://www.rymea.fr/la-p%C3%A9dagogie/> (2017年9月4日閲覧)
- Willems, Edgar. (1996) *Carnets pédagogiques, No.1 Chansons de deux à cinq notes*. Pro Musica, 10em éd.
- Willems, Edgar. (1986) *Carnets pédagogiques, No.2 Chansons d'intervalles*. Pro Musica, 8em éd.
- Willems, Edgar. (1994) *Carnets pédagogiques, No.2B Chansons d'intervalles avec accompagnement au piano*. Pro Musica, 6em éd.
- 海老沢敏 (1986) 『むすんでひらいて考—ルソーの夢』岩波書店。
- 海老沢敏 (2012) 『ジャン＝ジャック・ルソーと音楽』ペリかん社。
- 葛西健治 (2012) 「こどものうたにおけるオノマトペに関する一考察」『こども教育宝仙大学紀要』3、pp.33-43.

浜崎慎吾 (2016) 「うたごえ運動指導者の訳詞—戦後日本における「ロシア民謡」の受容と変容」『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』第300集、pp.26-46.

若林一恵 (2016a) 『エドガー・ウィレムスの音楽教育の意義—その思想および実践の考察を通して』2016年度 東京芸術大学博士論文.

若林かつ恵 (2016b) 「エドガー・ウィレムスの音楽教育の成立背景—新教育運動とアーツ&クラフツ運動の影響に着目して—」『ダルクローズ音楽教育研究』第40号、pp.50-62.

## **Japanese Lyrics of the songs of Edgar Willems**

### **“No. 1 Songs of two to five notes”**

WAKABAYASHI Kazue

This paper aims to propose Japanese lyrics of the songs in the practices of the pedagogy of Edgar Willems (1890-1978).

The pedagogy of Edgar Willems is prevalent in Europe and mid and south America. However, in Japan, it has not been paid attentions. Edgar Willems composed some songs used in the pedagogy of Edgar Willems. The songs are short and easy to sing. Children are familiar with them as they sing them on a daily basis. Whereas the lyrics of the songs are originally written in French, the lyrics are translated into Italy, Spanish, and Slovenian for the practices. It is necessary to translate the lyrics of the songs into Japanese for introducing the pedagogy of Edgar Willems to Japan.

We translate the lyrics of three songs in “No. 1 Songs of two to five notes” These songs are frequently used in actual practices. “No. 1 Songs of two to five notes” is one of the book series “Educational books” in which Willems explain the pedagogy. Because these three songs are short and easy, it is difficult to put words on few notes. Moreover, for the rhyme and onomatopoeia, we cannot determine automatically whether we prioritize rhythm or meaning. We should select words carefully considering pitch and rhythm.